インタビュー 麻布 旬の人

二一世紀ノンフィクション大賞を受賞した鈴木洋史さん（昭和51年卒）

すずきひろしさん一九五七年生。一九七六（昭五一）年麻布高校卒。フリーライターを経てノンフィクション作家。一九九八年、野球監督王貞治とその父、王仕福の故郷への思いを追求した「百年目の帰郷」で二一世紀国際ノンフィクション大賞（小学館）受賞。一九九九年、小学館より出版。本に「天国と地獄ラモス瑠偉のサッカー戦記」文春文庫、など。本名、鈴木浩。

わが麻布学園の卒業生となると多士済々。その中で、とくに若々しく特異な活躍をしている今が旬の人・・・第一回はこのたび二一世紀国際ノンフィクション大賞を受賞した鈴木洋史さん。お話をうかがっていて繊細さの奥に剛直なチャレンジ精神を感じた。

きき手　齋藤十氷上

大賞おめでとうございます。王監督への興味はどのような点だったのですか。

長い間タブーだった国籍という観点から王監督の内面の葛藤に迫りたい、と思ったのです。

しかし王貞治自身は日本で生まれ育った典型的な二世ですね。主人公はむしろ中国から出てきた父親の仕福氏のように読めますが。

ええ、二人の王が主人公です。あるいは息子の王貞治は表層で、父親の仕福は深層、と言って良いのでしょう。この物語は息子の貞治が自らの深層に触れて故郷を回復する物語なんです。

それにしても取材の運に恵まれましたね。特に中国での。

ええ、我ながら運が良かったと思っています。マスコミはもちろんのこと、家族の誰もたずねたことがなく、父親の死後「どこにあるのかさえわからない」存在になっていた父親の故郷を探し当てられたのですから。沢木耕太郎と言う作家が「幸運に恵まれない取材からはノンフィクションの傑作は生まれない」と言っています。それまでの取材が意味を持つかどうか運一つ、というところがあるのです。

出来栄えのほどはご自分でいかがですか。

とにかく父親の故郷を発見できたことで過去の話に終わらず、多少なりとも歴史の中での人間の営みの不可思議さを描けたのではないかと思っています。歴史を背負った物語性のある作品が書けたかなと思っています。

ところでどのような学生時代だったのですか。

麻布にいたころは、詩人を夢見るような、人見知りする生徒でしたね。大学では演劇に熱中しました。就職はマスコミ関係すべてだめでした。内気だったものですから。（笑）それにしても麻布はいい学校だったと思います。お互い干渉しないで、いいところを伸ばす雰囲気がありましたね。

今後どのようなお仕事を？

私は「主張する」人というより「描く」人だと思っています。取材の中で語られなかった真実を想像して物語にしていく、そんな文学性のある作品を書いていきたいと思っています。

ご活躍を期待しています。

（一ページより）

講義の準備をなすのであった。塾生日く、先生はこれまで数百回講義をなされていても、尚準備が要りますかと、先生日く、教育は真剣勝負の如きものである。武士が真剣勝負をするに当たり、いかなる弱敵に向かうにも、刀の目針は湿さぬ訳にはいかぬ、と。」この佐藤一斎の教育姿勢、精神は、とりも直さず江原先生ご自身が、実践躬行、身を以てお示しになられた精神であり、生き方であります。そして、いかなる場合にも何事に対しても、一点の私心、私利私欲なく取り組み、「青年即ち未来」と信じ、終生「青年の友」として生きた先生のご生涯、ご人格を偲ぶとき、私ども教育に携わる者を導く一筋の光が見えてくるのであります。江原先生、願わくは、学園の行く末を見守り、本日墓前に参列する新中学一年生を正しくお導き下さい。

一九九九年五月一九日

麻布中学・高等学校校長　根岸隆尾